

1.17は忘れない

1月17日を中心に各学校において震災の追悼行事や震災の教訓を語り継ぐ取り組みが行われています。震災で犠牲になった方々への追悼と、震災の教訓を後世に伝え、震災の経験のない人たちに災害への備えの必要性を気づかせています。学校のほかでも、多くの語り部たちが、家族を亡くしたつらさや避難生活の不便さ、地域の助け合いや思いやりなどの、震災の体験と教訓を“語り”として、被災体験のない人々に伝えています。

兵庫県内の中学校での震災を語り継ぐ取り組み

西宮市立浜脇中学校では、阪神・淡路大震災のあった1月17日を「浜脇中学校防災の日」として定めています。その日に、校区内の各地区で、地域住民の方々から震災当時の話を聞いたり、地域の方々と防災訓練をしたりし、交流を深めています。

この活動は、震災当時の生徒会本部役員の発案で、震災時の地域の人々との交流、つながりの大切さを語り継ぐ取り組みとして始まったものです。

震災以降に生まれた生徒たちは、震災を身近なこととして感じるのが難しくなっています。震災で学んだことや感じたことを風化させないために、地域の人たちとの交流を通して、震災の教訓や、防災について学ぶ機会になっています。



地域の人から震災当時の話を聞く



地域の人との緊急搬送訓練

生徒の感想

- 地域の人々とかような機会により深く知り合えることが、災害が起きたときの協力につながるんだと思う。(2年生男子)
- 地震はどれだけ気をつけていても、突然来るものだから、来たときになるべく落ち着いて行動できるように非常食などをしっかり準備しておきたいです。本当に大変なことがあったということを、次の世代にも伝えていきたいです。(3年生女子)



小野市立小野中学校 追悼集会

朝来市立朝来中学校 全校生による黙とう

丹波市立和田中学校 防災講話



伊丹市立東中学校 DIG訓練

高砂市立荒井中学校 分灯式



宍粟市立山崎東中学校 1.17防災学習

福崎町立福崎西中学校 消防署との合同訓練

南あわじ市・洲本市組合立広田中学校 地域住民との防災訓練

防災意識を高める取り組み

防災意識を高める取り組みとして、技術家庭科の授業で、電池のいらぬライトやラジオ、防災ずきんなど災害時に役立つものの製作実習が行われています。災害時に役立つだけでなく、災害が起こった時にどんな備えが必要かを考える機会になっています。



普段は座ぶとんとして使用し、災害時は防災ずきんとして使用できる。

こんな工夫もできます。

工夫1.
中綿のかわりにうすい毛布や保温アルミシートを入れて、防寒具として活用できる。

工夫2.
自分の存在を知らせるためのレスキューホイッスルを入れるポケットをつける。



電池を使用しなくてもラジオ、ライトとして使用できる。携帯電話の充電機能を備えたものもある。

阪神・淡路大震災を語り継ぐ

人と防災未来センターは、2002年4月神戸市中央区につくられた、阪神・淡路大震災の経験と教訓を後世に継承し、国内外の災害による被害の軽減に貢献する施設です。特撮とCG、大型映像と音響などで兵庫県南部地震のすさまじさを伝え、また、実際に震災を経験した人たちが、当時の様子などを語り部として伝えています。

ここでは、震災を語り継ぐ取り組みについてみてみましょう。



人と防災未来センター（神戸市提供）

「私たちが語り継いでいこう」 ～人と防災未来センター 語り部の思い～

私は、震災前から仕事やボランティア活動を通じて「命の尊さ」「助け合いの大切さ」「生きるとは何か？」を伝えてきました。今は、それに震災での貴重な体験が加わり、体験した人にしか語れないことを伝えていけたらと考えています。震災のことは学んでほしいですね。そして、何かのきっかけで学んだことを思い出していただきたいです。語り部さんたちは、同じ震災でもそれぞれ違う体験をされています。でも、「私たちが語り継いでいこう」という思いは、皆さん同じであると思います。

（人と防災未来センター 語り部の話）



「私たちが語り継いでいこう」 ～ひょうご安全の日 1.17のつどい～

兵庫県は、1月17日を「ひょうご安全の日」として、防災意識を新たにするとともに、阪神・淡路大震災の経験と教訓を発信し、1.17を忘れず語り継いでいます。この日には、「1.17ひょうごメモリアルウォーク」、献花や追悼を行う「1.17のつどい」、「交流ひろば・ステージ」、「防災訓練」が開催されています。

メモリアルウォーク

緊急時の避難路、救援路として震災後に整備された山手幹線を歩いたり、震災モニュメントを巡ったりしながらゴールのHAT神戸（中央区）を目指して歩きます。

震災当時は、交通機関が途絶えたため、幹線道路を徒歩で移動するしかありませんでした。そのことを思い出し、改めて防災への意識を高めています。



震災を語る ～語り部の方の話～

命さえあれば何もいらぬ… 耐えた、叫んだ、極限状態の7時間

震災の時、私たち家族4人は神戸市東灘区に住んでおりました。1995（平成7）年1月17日・午前5時46分、連休明けの朝でした。1階の部屋で家具調コタツを片付けることなく、いつもと違う方向で主人と布団を2組敷いて休んでいました。

何の前ぶれもなく「ドドン」と、いきなり何が何だかわからなくなり、一瞬のうちに築20年の我が家は2階が1階を押しつぶす形で全壊。2階がコタツの高さまで落ちてきて、私たち夫婦は1階で生き埋めになってしまったのです。幸いにもコタツと畳の間にわずかな空洞ができて圧死を免れましたが、身体は石膏で固められたように仰向けの状態で動けません。顔の上には押し入れのふすまが覆ったおかげで、何とか窒息せずに済みました。それでも「ここで人生終わりかな…」と、死を感じずにはられない恐怖を味わいました。

そんな時、外から息子の声が聞こえました。神様の声が聞こえたような気がしました。息子が生きていることがわかり、本当に嬉しかったです。あとで聞いた話ですが、息子は2階で洋服ダンスの下敷きになったものの、なんとか自力で脱出することができたそうです。息子が自力で這い出した時、「お父さんとお母さんは、向こうへ避難されましたよ」という人違いの情報があつたそうです。息子は「なんとこの親だ…」と腹を立てながらあちこち捜しかけたものの、途中で「そんなはずがない！」と気が付いて戻ってきてくれました。私たち夫婦は、布団の中にいたおかげで大きなケガこそありませんでしたが、コタツも傷ついてきて荷物の重みが身体にどんどん加わり、そのため呼吸もゆっくりしかできなくなっていました。1月といえば真冬の寒い時、トイレに行きたくなるのも我慢しなければならず、長く苦しく辛い時間をひたすら耐えていました。

我が家は、このあたりではひどい潰れ方をした1軒でした。外から見ると人間が生きているとは思えない状態でした。主人がイチかバチかでコタツを蹴ってみますと、外にいた息子にその音が伝わり、近所の方々も飛び出してきてくださいました。声を出すよりも物を叩いた方が、響いて外に伝わるんです。

お隣は偶然にも大工さん。半壊だったため道具が取り出せたのと、専門知識をお持ちだったことが幸運でした。潰れた家の真上から少しずつ壊していき、震災から約7時間後に私たちは奇跡的に助けをいただくことができました。大工さんをはじめ協力してくださったご近所の方々や息子の温かさが本当に嬉しかったですし、感謝しております。

この震災で「命さえ助かったら何もいらぬ」というところまで追い詰められ、命の尊さや人の心の優しさ、小さな親切、健康が財産であるということを知りました。その一方で、壊れた家からお金や貴重品を狙う泥棒が横行するなど、人間の醜さも目の当たりにしました。そして、たくさんの方が亡くなられた中で九死に一生を得て、いまを生かされていることに、また、日頃当たり前になっていることですが空気が一杯吸えることに感謝しております。

あの時、ご近所の方々や息子が命の恩人でした。もちろん、恩人たちが助かっていなければ、私たち夫婦もきっと助からなかったと思います。そのご恩返しと、亡くなられた方々の供養のために、この体験を後世に伝え、地震・防災対策に役立てていただきたいと、こちらで語り部のボランティアを夫婦でやらせていただいております。最後になりましたが、全国からのご支援本当にありがとうございました。